

---

# 西の園

松野胡桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西の園

### 【Nコード】

N10330

### 【作者名】

松野胡桃

### 【あらすじ】

列車の中だけの男の子と蓮華との不思議な会話……。  
まだ大阪から九州に行くにはリクライニングシートの急行列車で  
行けた頃のお話です。

純な曇りの無い美しさを文字にしました。

> i 1 2 2 8 2 — 1 7 3 2 <

下りの夜行列車、間もなく発車です。お母さんに手を引かれた男の子はわくわくしながら乗込むと、辺りを見回しています。お母さんが席まで導くと、男の子は身軽に跳ねるように席に着きます。男の子は荷物なんて持っていないません。よそ行きのポケットから小さな赤い花が二輪、ちよつとだけのぞいています。

「あまり混んでへんな、お父さんが会社行くのとはちがう」

「ここは指定やからね」

「シテイ？ そつか……」

立っている人は見えません、まだ席がたくさん空いています。

つり革もありませんし、座席もいつもの電車とは違うようです。それはみんな進行方向を向いたリクライニングでした。

列車はゆつくり動き始めます。

「お婆あちゃん元気にしてんかな？」

「もう動くの？ お客さん少ないね」

「そやから……」

男の子はさつと通路に出ると、さつさと斜め後ろの窓際へ行きます。大阪の夜景は久しぶりでした。テレビなんかで見るより、ずっときれいです。

「かずくん、そこは人が来るかもしれんよ。どうせ、すぐ眠るんやろ」

「ぼく、ずっと起きてる」

外に拡る窓明り、光の粒をじいっと見ているのはとても面白いことでした。男の子は動くものがとても好きで、小学校へ行く途中にある踏みきりで足止めをくうのが嬉しいくらいです。でも、列車に乗ってしまえば、動くのは外の景色です。男の子は食い入るように注目していました。

長いことおとなしくしているものだから、お母さんは、大きな、それでいて薄い本から顔を上げて「かずくん、何を見てんの？」と言います。

「うん……眠くないよ」

駅に止まってもいつこうに混む気配がありません。平日の夜行列車の指定席だから、とは考えられませんでした。

外の変化のない景色をみていると、少しずつ眠くなってゆきます。ずっと眠らないで外を見ているも仕方がないと思いはじめていました。

「お母さん」

「まだ起きてるの？　ここに来、そこは……」

「明日、何時頃着くん？」

「十時過ぎよ。　ここにきて眠ったら？　明日しんどいよ」

「まだまだ着かんね。もし眠ったら朝早く起こして」

「お母さんは寝てるよ」

男の子は、どうせなら夜より朝の景色がいいと思いました。さつそく眠ることにしましたが、どういうわけかなかなか寝つきません。車輪とレールがぶつかるリズムが気になるのか、リクライニングに慣れてないからか……。

でも、先に眠ったのはお母さんだったかも知れません。本のページはいつまでたってもめくられることはありませんでした。

>  
<

>  
<

「かずくん」

そう聞こえた男の子は目を開くと、そこで眠っていたことがわかりました。ぼんやりした頭を上げ、同時に窓のすぐ外を駅が通り過ぎるのを見ます。

「かずくん」

ハッと見ると、それは薄紅の女の子でした。

「だれ？」

「ああ、良かった、お話ができて」と、空気にサアッと溶ける、あまりに淡い声です。

「……………」

すぐ隣の席、力尽きた様なほの青い肌を空気の様な薄紅のワンピースが包んでいる……………そんなふうに見えました。

「あっちは西でしょ？」と、女の子は列車の進む方向を指差します。  
「うん」

「わかるのよ私。 どうしてこの中はこんなに寒いのか？」

まるで季節が違つみたい。せつかくお話ができると思つたのに、眠くなつちゃう」

「さむい？」

「きつと、この速いものは一晩で私を元の所へ戻してくれるわ。かずくんはどこに行くの？」

「九州、お婆あちゃんの所。 だれ？」

「おどかした？ごめんなさい、せつかく眠つてたのに」

「ひとりだけ？」

「うん」

「……………なんで僕の名前……………」

「わたし、ずつといっしょに居たのよ、ほら、その花びらのおかげにと、女の子は男の子のぽけつとからちよつとのぞいた赤い小さな花に触れた。

男の子はすっかりおどろいて、やっと、「誰？」と言えました。

「私は……………小さなお花…………… 生きている花から飛出してしまったの。花にはみんな精霊が住んでるのよ。 でも、この花、偽物なんだもの。中には入れなかつたし、いい香りもないの」

「これは」と、男の子はそれをポケットから取出します。「造花なんや、プラスチックの花や。昨日、お母さんと花瓶を買いに行った

時、おまけにもらった」

「私は蓮華草よ、それは似てるけど私の花ではないわ。でも！私の住んでた西には、たあつくさんの蓮華があるの。私にはそこでもなければならぬことがいっぱいあるの。ああ、早く帰って蜜をいただいて、もどどおり、元気になりたいわ」

「……ふうん……」と、よくわからなくても真剣に聞きます。

「それ、もう一つあるでしょ」

「うん」と、男の子はポケットから小花をもう一つ取出します。

女の子はそれを手に取ってうつろな瞳に映します。

「……何日か前、ずっと西の蓮華畑で私は小さな女の子に摘まれたわ。その子は私の蓮華達をしつかり持ったままだった。

気が付いたら、こんな速いものに乗ってたの。東へ東へ……すっかり元気のなくなった蓮華を大きな手が女の子から取り上げると、真っ暗な箱の中に放り込んだ。蓮華はだめになっちゃった。光も水もないの……私は出て行った」

「どこに？」

「外へよ。……私の蓮華達はみんなしおれてしまったわ。とても苦しくって……だけど、私ではどうにもならない、見捨てて来るしかなかったのよ。でも、驚いたわ、人がいっぱい、いっぱいいるの。それだけじゃないのよ、地面はとっても堅い。地面なんかじゃないわね、乾いた石だわね。高い高い建物がいっぱいあるでしょ、だから一日中、光のあたらない所がたくさんあるわ。

……あんなところでは花達は生きてゆけないわ。わたし、探して回ったのよ、そこらじゅうをよ！なのに……見つかるのは、鉢のなかに一人ぼっちで……。花壇もあった、だけど彼女等は病人のように黙って並んで咲いてるだけだった」

男の子は何を言っているのやらわかりません。とても眠いはずなのに、それをこらえる必要はありませんでした。まるで夢みたいだと思つと、なるほど夢なんだというところに落ち着きます。そんなことより、女の子の話しをもっとわかりたいと思つていました。

「私、とつても苦しかった。風の匂いも嫌なの。水も全然違うわ」  
「何が？」

「水はもつといい香りがするものよ」

……

バサツと本を膝から落したお母さんはすぐに目を覚まして拾いあげ、男の子を見ます。

「起きてたんね」と言つと、それから真つ暗な外を眺めながら「こつちきときなさいよ」と言います。

「うん」と、男の子は知らない女の子の隣で恥ずかしげに言います。

ところが、お母さんは本をバッグにしまうと、すぐにスヤスヤと寝息をたてはじめます。

「なんや……その子、誰つてきかれる思つた」

「あの人には見えないのよ、私のこと」

「見えへん？ ……」

「……宇宙のこと、地球のこと何も知らない、蓮華のような心でなければ、私を知ることにはできないのよ」

「……夢なんや……」

「かずくんも、そのうち……覚めるのね……」

女の子は外を見ると息を吐いて椅子にもたれます。

「夜なのよ、夜は眠るものよ。私、街では寝てばかりいたの。出て行きたかつたけど、身動きできないくらい疲れてて……私はいつもお花の中に居てあげること、喜んだり歌ったり、生きることができるのよ。私は一日に何度もいるおんなところで眠つたわ。昼間は眠つても体が乾いてしまふみたいに苦しいの」

「その……今も苦しいんやね」

「どうして？」

「……声が死にそうや……」

「わかるのね？でも、今はそうでもないの。夜は昼間ほどではないわ。でも、明日も帰れなかつたら、私はもうだめだった。……」

外には何の明りも見えません。それでも女の子は外をながめて

います。

「夜も、違っていた。夜更けまで偽物の光が雲を明るく照らしてた。……夜は暗いものよ」

言葉はとてもゆっくりしていました。

「……ほんまにこれで帰れるんやね？」

「帰れなかつたら、蓮華のあるところで我慢する。本当は、私が生きてられるのはきのうまでだと思ってた。二日前の夜、お日様の下で、神様に迎えに来てもらおうと思って高いビルの頂上でね、星すら見えない空を見詰めながら眠ったの」

「……そうやなかつたんやね」

「夜が明けたら……お日様は雲を払いのけて、きれいな朝日を私にくださった。私はまだ立てるし、風に乗ることもできる……そんな勇気が湧いてきてね、帰らなくちゃ、そう思った。だって、お日様ってどこでもいっしょなの、ずっと西も東も……思い出したの、私はあそこでしなくてはならないことが沢山ある」

「どんなこと？」

女の子は目を閉じていました。

「眠いんやろ？」

「うん……、……蜜の作り方、水や栄養の取り方、お日様の大切さなんかを教えるの。蜜蜂を呼んで来たり……それにしても、この中は寒いわ」

「そうかなあ、冷房がきついんかな？」

「レイボウ？ 花屋さんの花は多くがぬげがらね、お話できるような妖精はいないし、居ても、人間に育てられることを当然だと思ってるわ。花屋さんの隣には花瓶がたくさん並べてあったの。その中の一つに私の花によく似た花があった。嬉しくなって飛びついたら偽物だったんだけど」

「ああ、あそこは隣が花屋さんやね。わかった！ そんなときからいっしょやね？」

「かずくんは西へ行く話をしてたわ、それも明日行くって……なん



て幸運なのかしら。あのと、かずくんが天使に見えた」

「へええっ」

列車は静かな夜の田んぼを割ってはしったり、山の斜面を横切ったり、東雲の海から潮風を受けたりしつつ、西へ向けて快速に進みました。

朝風が起こる頃にはその長い列車は、深い青色を見せ始めます。

><

><

「かずくん」

そう聞こえた男の子は目を開くと、そこで眠っていたことがわかりました。ぼんやりした頭を上げ、外を見ると、そこにはどっしりとした緑の山が朝の白い光に包まれています。

「かずくん」

ハツと見ると、それは薄紅の女の子でした。「……………」

「本当に良かった、お話ができて」と、空気にサアツと溶ける、あまりに淡い声です。

すぐ隣の席、朝日に輝く様な白い肌を風で作った様な蓮華色のワンピースが包んでいる……………そんなふうに見えました。お母さんの方を見ると、もう起きていて薄い本を膝の上に開いています。

「もう朝なんやね……………」

「この土の匂い、風の匂い……………帰って来たのよ、わかるの。私はここで降りて行くわ、かずくん」

「……………」

「この偽物の花、幸運の印だから、みんなに見せてもいいかしら……………ひとつ、いただくわね？　だって二つもあるんだもの」

「ええけど……………」

「私が話したこと、わすれないでいて、私達のために……………。もう行かなきゃ……………」

「ねえ、いつか……………そうか、夢やったら、またいつかあえるん

やね……」

「もう行かなきゃ。もう会えないわ……私はここを離れないわ。何て寒いのに、外はとっても暖かそう」

薄紅の女の子は透明な風になりました。……そんなふうに見えました。今更、それは元々、透明だったのだとも思えました。

>  
<

>  
<

「かずくん」

耳慣れたお母さんの声で目を覚ました男の子はそこで眠っていたことがわかりました。ぼんやりした頭を上げ、外を見ると、そこにはどつしりとした緑の山々が晴れた朝の光に照らされています。

「かずくん、起こしてくれ言つたやろ、朝やで。そこは誰も指定しなかつたんやね」

お母さんは薄い本を開いていました。男の子は山に注目しました。すると、さっき見た山がすぐ後ろにちゃんと見えます。

「よう寝たの？」

「うん」と言つたあと、「夢も見た」と小さく言いました。ぼんやりする頭で、薄紅の女の子のことを静かに思い出そうとします。

「まあ、きれいな蓮華草」と、お母さんが外を見ています。

それで、男の子はもう片方の窓に目をやりました。すぐに「アツ」と声が出てしまい、駆け寄らずにはいられませんでした。窓の向こう、一面、ずうつと遠くまで、蓮華草が敷き詰まるように咲いています。そこら中、あの子の色です。「これ、レンゲやね？」

「うん、知らなかった？」

「知ってた。知ってた」 頭の中に、『……蜜の作り方……蜜蜂を呼んで来たり……』はつきりと女の子の声が残っています。

帰ってきたんだ と思うと、とっても嬉しくなって、もう手を振らずにはいられませんでした。

その列車はいつもと同じ時刻に終着駅へたどり着きました。

男の子はお母さんと元気に降りて行きます。荷物なんて持っていないせん。

男の子は赤い造花を席に置き忘れましたが、そこに残っているのは一輪だけでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1033o/>

---

西の園

2010年10月9日17時29分発行